知って得する

子育て小事典

第９号

光の泉幼稚園
園長高島哲男

どこまで口や手を出し、どこから任せたらよいか

お母さんからの質問で「子供に口を出したり手を出したりするとき、どこまで手を出して、どこから本人に任せたらよいのかその基準が分からないので教えて欲しい」とよく聞かれます。しかし、これは子供によっても違うし、成長過程でも変わってくるし、各家庭の教育方針によっても違うのでこれが基準ですと言うことができません。「お父さんとお母さんで相談して決めるしかありません。そして、やりながら掴んでいくしかありません」という以外にないのですが、これで終わっては身も蓋もありませんので、ちょっとだけお話します。

幼児教育というのは自立への援助に尽きると思います。自立が全部自分一人で出来るということなら、出来ないことができるようになっていく過程の途上にあるわけですから、今まで手をかけていたことを少しずつ止めて本人にやらせるようにしていけばよいと思っていただけばいいのです。やりながら掴んでいけばいいというのは手を引いたら全く出来ないことが分かったら、もう少し前の段階まで戻ってそこまでは手をかけてあげるなり、教えてあげればいいということです。

ここで心にとめていただきたいことは援助するということはヘルプではなくサポートだということです。ヘルプというのは老人介護のように、出来ない人に代わって全面的にやってあげることを言います。それに対してサポートというのは援助は最小限にして出来るだけ本人にやらせることを言います。サッカーのサポーターは応援だけしてゲームには一切手を出しません。このヘルプとサポートの区別が出来ていないと、すなわち、サポートするのではなくヘルプをしてしまうのでどこまで手を出したらいいのだろうという疑問が生じてくるのではないかと思います。

また、もうひとつ心に留めていただきたいことは親の願いや要求を普段からきちんと伝えるということです。

これを私は教育的要求と言っています。お父さんやお母さんの『こんな子供になって欲しい、子供にこうやって欲しい』という具体的な願いを伝えることです。漠然といい子にしなさいとかお行儀よくしなさいではなく、「背中をピンとまっすぐにしなさい」、『幼稚園から帰ってきたらカバンはここにこういうように掛けなさいとか制服はこのようにたたんでここに置きなさい、あるいはハンガーにかけなさい』等具体的に方法や程度も親の要求として伝えるということです。そうすることによって子供は目的意識をもって自分から進んで行動する子になりますので一つ一つ口を出す必要がなくなります。すなわち、子供に自分の問題として意識させることで、親の口出しや手出しがぐんと減るはずです。そして、親の要求と違って受け止めていたら、行動を見れば分かることですから、その時に口を出して修正してあげればいいと思います。すなわち、『言って聞かせ、やって見せ、やらせてみて』伝えるのです。さらに、その良い行動を自発的に行い続けてもらうためには『褒めて』あげることです。私は多くの保護者の中に見られることは親の要求を伝えることが不十分というか丁寧でないと思います。すなわち、子供が理解できる言葉とスピードと回数の配慮が足りないと思います。ある時親子遠足で動物園に行きました。「養生中です。芝生の中に入らないでください」と立て看板があり、ロープが張ってありました。あるお母さんはそれを子供に次のように伝えていました。「ここの芝生はまだ赤ちゃんなんだって、だから、この中に入って踏んでしまったら、赤ちゃんは死んでしまうから、大人になるまで中に入らないでねと書いてあるんだよ」と教えていました。子供に分かりやすい教え方だと思いました。

親のレベルで、1回言えば分かるだろうでは乱暴すぎます。親は子供に言った、でも子供は親の言った通りに理解しているとは限りません。子供は発達途上にあるわけですから、子供のレベルに合わせて言葉を選んでやらなければいけないのです。理解できていないから、子供は親の希望とは違ったことをします。それを見て親は「何度言ったらわかるの」と言ったり、自分がやってしまったりすることがあるのではないでしょうか。もう一度言いますが、「言って聞かせ、やって見せ、やらせてみて、褒めてやる」ことです。

しかし、冒頭の質問が多いのは自分の判断が本当にこれでいいんだろうかと思うからで、その確認をしたくなるのは当然の思いだろうと思います。ですから私は最後に、「当園では発達診断を行っているのでそのプロフィールを見ることで適正な係わりなのか、口の出し過ぎなのか、手の出し過ぎなのかよくわかるので診断結果を楽しみにしてください」とお伝えしています。